

ダイバーシティ担当 菊池理事が行く！ 学部長・機構長インタビュー — 教育学部 編 —

各学部の男女共同参画状況や課題、ダイバーシティ推進室への期待や要望について、令和4年12月にダイバーシティ推進担当菊池理事とダイバーシティ推進室室員から、教育学部の野崎学部長とダイバーシティ推進委員の佐藤先生へのインタビューを実施しました。



野崎
教育学部長



佐藤先生
(ダイバーシティ推進委員会委員)

教育学部のダイバーシティ



菊池：「ダイバーシティ」というキーワードから、皆さんが連想することや考えることは十人十色です。毎回、お話を聞くだけ気づかされることが多いので、出来る限り自由に意見交換させていただいています。野崎先生にとって、ダイバーシティとは何でしょうか？

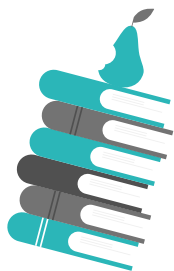
野崎：教育学部は、**色々な分野の先生がいらっしやる**んです。数学選修には数学者、国語選修には文学の専門家、芸術系も、本当にバラエティー豊かなんです。学生は、理系、文系混ざっていますし、男女比は、むしろ女子学生のほうが多いぐらいですね。そのため、**自分との違いを割と受け入れやすい環境**だと思えます。教育学部は、だいたいがダイバーシティに富んだ学部なんじゃないかなと感じています。

菊池：専門の繋がりで共通認識を得やすい学部とは違い、教育学部は教員の専門も様々です。ある物事について議論するときに、**この学部ならではのダイバーシティな雰囲気**があるのでは？と思いますが、いかがでしょうか。

野崎：はい、**違って当たり前**という中にいます。教科横断的な教育が求められているということもあり、「研究カフェ」というものをやっています。ある先生に、トピックを示していただき、参加教員が色々な視点で意見をやりとりするという場です。そこで新しい研究や教科を横断したものが立ち上がるという思いで、年2回ぐらい行っています。

佐藤：ダイバーシティは、新しいものや性質が違うものが合わさるところから始まるので、成果がでるまでにはすごく時間がかかったり、迂遠な道のりだったりするんですけど、大学の中で教育学部がその見本を見せていく使命があるのかなと思う面があります。例えば、教育学部のミッションには研究成果を上げることとは別に、「教員を養成する」という他の学部とは違う面があり、研究畑だけを歩んで来た教員の他に学校教育現場で長く教員を経験してきた方など多様な人材が集まっています。**多様な人材がそれぞれの良さを発揮して新しいものを生み出していく**というのはとても時代に求められていることと思っています。

菊池：「**教員を養成する**」ことを通じて、人の豊かさに触れ、社会に示していく、とても深いメッセージですね。



ホッとする瞬間



菊池: ホッとする瞬間について教えてください。

野崎: 金曜日の夜ですかね。週末だなと思うとホッとしますよね。

佐藤: 私は週末に第二の職場(育児・介護)が待っているので、寧ろ週末の方が緊張感が高まります。土曜日と日曜日はひたすら家族のニーズに応える、振り回される感じですね。ただ、私は運よく、生活、家族に関する研究をしていますので、振り回される中にも色々なヒントがあって、その場が研究対象になっているんです。ワンオペ育児の大変さとか時間がないこととか、全部研究の視点に置き換えられる。それはすごくありがたいです。大変なだけではない、どこか、内心で研究の喜びを感じているところがあります。



介護者の状況

菊池: 介護は終わりが見えず、いつどうなるかも分からないので、「出来るうちは、自分で頑張ろう」と過ごされている方も多いようです。介護経験者を交えた意見交換会の場を持ちたいのですが、既に定年退職されている方も多いのが現状です。

佐藤: 介護をされている方って、年齢的に役職についてる方が多いんですよね。私はそういう方々が、どう両立しているのかなと観察したりしながらやっている感じです。ニュースレターなどでも育児のことは出てくるんですけど、介護はなかなか出てこないのので、私は自分で直接お話を聞きに行ったりして情報を入れるようにしています。

菊池: 介護サポート^{*1}のシステム作りは、本学での課題の一つです。もっと情報を発信できるようにしていきたいと思います。

*1. 介護サポート

・ダイバーシティ推進室HP(両立の支援)

*タブを【介護】に切り替えることで介護に関する制度を見ることが出来ます。

・介護セミナー(R4年12月22日実施)

介護の専門家であるケアマネジャーから介護の基礎的な仕組みを学ぶセミナーを開催しました。

セミナーの資料をご希望の場合はダイバーシティ推進室(diversity_office@ml.ibaraki.ac.jp)へご連絡ください。



LGBTQ+を含めた環境づくり

菊池：現在、LGBTQ+に関して基本理念・基本方針及び、対応ガイドライン*2を策定し、ガイドラインに沿った対応及び周知を進めています。

佐藤：ジェンダーに関する授業を行っているんですが、授業を受けることで「自分を確信した」「自分に気づいた」と反応する学生がいます。ヤングケアラーの授業をした時も「自分のことだと思った」と言う学生がいるので、こういう「きっかけ」は大事と思っています。

菊池：LGBTQ+に限らず、人は誰も、つらい事を自分だけで抱えてしまうと、不安が募ってしまったり、または、無意識に我慢してしまったり、そういう経験ありますよね。周りに話せる人がいたり、情報共有の場があると、気づきや、不安の解消にも繋がるんだと思います。

人は皆それぞれに、求める形や安心して過ごせる環境があるのだと思います。一つのトピックに過度にフォーカスしたり、無理に触れようとしたり、枠にはめてしまうことのないように、状況を観察し、コミュニケーションや気づきを通じて、より良い環境づくりを進められるよう、教育学部の先生方、今後とも色々な意見交換よろしくお願いします。

*2. LGBTQ+に関すること

・茨城大学における多様な性的指向と性自認等を尊重する基本理念・基本方針と対応ガイドラインはR4年12月に制定しました。

